

南浦 涼介 (東京学芸大学)

教師はどのようにして

CBの教材を生み出せるようになるのか

善元幸夫のライフストーリーから

創作意欲

「面白さ」について

CBの教材を生み出せるようになるのか

善元幸夫のライフストーリーから

研究の背景と経緯

南浦 涼介 (東京学芸大学)

研究の背景と問題意識

日本語教育におけるCBIの動向

- * Brinton, Snow, & Wesche, (1989). におけるCBIの提唱
- * 年少者日本語教育におけるCBIへの着目
 - * 教科と日本語の統合としての議論 (例 斎藤 1999)
 - * JSLカリキュラムの提案 (文部科学省, 2003, 2007)
- * 社会とつながる日本語教育の潮流
 - * 日本事情教育としての議論の潮流 (例 細川 1999)
 - * 地域の日本語教育の潮流 (例 安場ほか 1991, 野元 2000)
 - * 社会参加をめざす日本語教育の潮流 (例 佐藤, 熊谷 2010)
 - * 市民性教育, CCBIの議論

- 「教科と日本語の統合教育」の言説の中で教科内容をどう日本語指導で教えるかに焦点が置かれ、「批判性」を含み込んだ「内容」の日本語教育の議論はむしろ希薄であった。その意味で「年少書文脈」でのCCBIの議論は少ない
- 日本語教育（年少者、成人限らず）でも、教師教育の視点は近年重要性が増している。
- 教師はどのように「内容」を生み出すことができるようになるのか
- 学校教師自体も、「批判性」の教育は重要視されながらもそれを生み出し、実践していくことは困難
- 教育目標としての批判性の重視、教員組織の中での批判的視点をめめた教育実践文化の実施の困難さ

①なぜ贄元さんは1970年代から日本語教育の中で、今から考えればCBIに当たするような実践をすることが可能だったのか。

②贄元さんが生み出してきた「内容」は何で、それはどのような視点を持っていたのか。

③教師教育として、今の時代に何を示唆するか。



1973年に初任で東京都の公立小学校へ着任
日本で初めての中国帰国者の日本語級へ。
その後、子どもたちのアイデンティティ形成に触れる「内容の選い」日本語教育実践で注目される。

例)・くじらは海に選ったか？
・植物の光合成
・キムチは日本に何を残したか？

1983年に公立の普通学級へ
その後1998年の指導要領改正で設置された「総合的な学習の時間」で着目される。

2000年代 新宿の小学校の日本語国際学級で実践をする。

リアリスティックな皮膚感覚

教師自身が「教育の哲学」を磨きながら（しかもそれは現場の状況にとらわれず自由に磨きながら）、かつ緊張関係を伴って「現場の一番本質的なところ」を見つけ、身を投げようとする感覚。

70年代当時の学生運動を含む社会的思慮への傾倒
その中で教育の実施が、「本質的に教育のことを考えざるを得ない場」としての外国人児童の日本語
学級につながった。

[illegible]